

## 主体的に学び、自ら将来を切り拓く子どもを育てるために（1年次）

—中学校における家庭学習の在り方と、自学自習できる力を育てる授業づくり—

上畑 直久（京都市総合教育センター研究課 研究員）

主体的に学ぶ姿とは、「自ら学び、自ら考え、判断し、問題を解決する姿」である。日本の子どもたちの学習意欲を高め、自らの将来を自信をもって切り拓く力を育てることが求められている。そこで本研究では、中学生の家庭学習を手掛かりに、学校での授業と家庭学習を連動させた「自学自習できる力」を育てる学習サイクルを提示した。家庭で考えてきたことを授業でみんなと交流しながら「答えが一つでない問題」を解決し、また次の授業につながる学習問題を家庭で考える。そして、家庭で学習したことを授業で発表したり交流したりすることで、家庭学習に有用感と意欲をもって取り組める生徒の育成を目指した。

### 第1章 「主体的な学びの姿」「自ら将来を切り拓く子ども」をめぐる現状と課題

#### 第1節 「主体的な学びの姿」とは

主体的に学ぶ姿とは、「自ら学び、自ら考え、判断し、問題を解決する姿」である。各種の国際調査から、日本の子どもたちの国際比較における学習時間の短さや、学習意欲の低下が指摘されてきた。特に、家庭での学習時間の短さは年々改善してきているものの、未だ課題がある。また近年、家庭学習の習慣をもつ子どもが増加傾向にあるものの、そうでない子どもとの間に年々学力差が広がっており、「学力の二極化」が進んでいると考えられる。一方、子どもたちの努力に対する意識が「他者と競うことよりも、周りの人を意識しながらも、自己の実現を図ること」へと変化してきているのではないかとされている。子どもの学習意欲を高めるには、主体的に判断し、よりよく問題を解決できる力を育てる学習環境を整えることが大切だと考える。

#### 第2節 「自ら将来を切り拓く子ども」とは

平成25年に出された第2期教育振興基本計画で、「社会を生き抜く力」の養成が示された。多様で変化の激しい社会を生き抜くために、個人の自立と協働を図るための能動的・主体的な力として示された。これを受け、国立教育政策研究所は、「21世紀型能力」を打ち出し、その目的を、21世紀を生き抜く市民の育成と、社会が直面している問題を共有し、協働して解を導くこととした。

そこで本研究では、「自ら将来を切り拓く子ども」を、集団による解決を通して、自分や家族、社会が直面している問題に取り組んでいく姿、また、そのために個人としてやるべきことに取り組んでいく姿と考えた。その実現をイメージして取り組むことが、主体的な学びにつながると考える。

### 第2章 「自学自習できる力」を育てる学習サイクルとは

#### 第1節 「自学自習できる力」とは何か

子どもが家庭学習に取り組むよう働きかけ、最終的に主体的な学びにつなげるためには、子どもに家庭学習に関する成功体験をどれだけ積ませるかが鍵となる。中学校に入って、小学校からの家庭学習の取組が大きく変わってしまう中で、宿題でも自主学習でも、取り組んだ成果を評価してもらえれば、子どもたちは家庭学習に有用感を感じる。「自学自習できる力」とは、「自分で学習する意欲そのもの」である。教師が「自学自習」の仕方を指導・評価し、子どもたちが家庭学習を有用なものとして認知したとき、「自学自習できる力」が育つと考える。

#### 第2節 「自学自習できる力」を育てる学習サイクルの構築

「自学自習できる力」を育てるため、学校の授業と家庭学習を連動させるサイクルを構築した。このサイクルの要点は次の三点である。

- 授業と授業をつなぐ学習問題を開発  
→答えが一つでない学習問題を解決するために学ぶ。
- 家庭学習を生かした授業改善  
→家庭での個の学びを、授業の集団の学びで生かす。
- 家庭学習の支援  
→家庭で取り組む予習シートやふりかえりシートを示す。

子どもたちが家庭で考えたことを授業に反映することで、思考力や授業に意欲的に参加する態度を育成することができると考える。また、協調的な学習を行うことで、自ら考えてきたことを発表し交流することの有用感と、必要な学習を整えておこうとする責任感、自主的な学習習慣を身に付けることができると考えている。

## 第3章 「自学自習できる力」を育てる学習サイクルの実践

### 第1節 授業と授業をつなぐ学習問題の開発

本実践は、第1学年社会科で行った。単元を貫く学習課題を設定し、単元を通してその解決を目指す。また、授業と授業をつなぐ学習問題を設定し、自分の考えを理由や根拠を付けて論述する。枠内は、問題をつくる際の要素である。

- 自分の考えを他者と交流し、比較・吟味して、自分の考えを深めたり、新たな問いを見つけたりすることができるもの（「集団の学び」のために）
- 自分の考えを「理由・根拠」を示しながら説明できるもの
- 現実社会の出来事に即したもの

学習問題は現実社会の出来事に即したものを つくるよう心がけた。地理的分野「ウ 世界の諸地域（ウ）アフリカ州」では、アフリカの飢餓問題とモノカルチャー経済の関係をテーマに作問した。この学習問題が学校でも家庭でも論じられ、また身近な大人も学習に関わることにより、子どもたちが多様な答えを導くことを目指した。

### 第2節 家庭学習を生かす授業改善の実践

#### (1) ICTを活用した授業展開

授業時間を効率よく使うため、プレゼンテーションソフトを活用した。プレゼンテーションでは、前時の最後に家庭学習として配布した「予習シート」の確認を行い、課題解決に必要な知識・技能の習得の場面とした。家庭で取り組む数は少ないものの、挙手して発言する数が日に日に増していった。また、画面に子どもたちの目線が集まり、教師との対話が活発になった。更に、理解する順序に合わせてプレゼンテーションすることで、子どもたちが学習したことを家庭で振り返りやすくなった。

#### (2) 子どもの発言をうながす指導

家庭で考えてきたことを、少人数のグループ活動で交流した。その際、家庭で予習シートや学習問題に取り組んだり、自分の考えをつくってきたりすれば、それを発表したいという意欲が生まれると考え、家庭で調べたり考えたりしたことを発表する場を設定した。また、グループ活動を、司会を中心に取り組むルールを決めて行った。小学校から取り組んできていることもあり、決められた手順を守りながら取り組もうとしていた。

#### (3) ふりかえりシートの指導

アフリカ州では、2時間にわたって「アフリカ州の抱える問題は何か」「アフリカの可能性は何か」と連続性のあるものを学習問題として示し、家庭

で自分の考えを「ふりかえりシート」にまとめた。論述した内容に教師が具体的なアドバイスを加えることで、子どもたちが論理的に自分の考えを書けるよう指導した。また、これに取り組むことで、自分の考えを理由と根拠を示して発表することが定着し、子どもたちの間に安心感をもって発言できる雰囲気が生まれるようになった。

#### (4) 板書・ノート指導

家庭で「学習問題」や「ふりかえりシート」に取り組みややすくするために、授業1時間分のノートを見開き2ページにまとめた。また、板書する際、教師と子どもたちの動きを一致させるため、板書内容も読み上げながら書き、書き終わりを揃えた。「書くときは書き、話すときは話す」と、学習の手順が定着し、学ぶ雰囲気が高まった。

### 第3節 家庭学習の支援を重視した実践

分析の結果、「ふりかえりシート」がテスト結果に一定の効果をもたらしていることがわかった。また、協力校で行われている家庭学習支援の取組について検証し、支援に必要なことを三つにまとめた。

- 小・中学校で共通の学習規律を整備し、子どもたちが安心して学習できる環境を整える。
- 学習に取り組んだ成果を、どのように直せばよいか具体的に指導し、取り組んだら必ず再評価する。
- 一人で家庭学習に取り組むのが難しい子どもを支援する体制を「校内」に整備する。

## 第4章 主体的に学び、自らを切り拓く子どもを育てるために

### 第1節 研究の成果と課題

生徒アンケート調査では、家庭学習の必要性について、理由のほとんどが「テストの点数や成績を上げること」であった。一方で、家庭学習の取組状況から、評価のためだけに家庭学習に取り組むのではなく、自分の調べたことを発表するなどの有用感を得るために家庭学習に取り組んでいる様子が見られた。更に、子どもたちは家の人のアドバイスで家庭学習に取り組むものの、自分で継続して取り組むことが難しいことがわかった。

### 第2節 主体的に学ぶ姿の普遍化を目指すために

家庭学習に「価値」を感じることができるよう、小・中学校間で共有する「学習規律」を整備し、「グループ活動」の取り組み方の継承と、家庭での学習支援が必要な子どもたちを支える「学習支援事業」の整備を進め、安心して取り組める学校の授業と家庭学習のサイクルを構築することが大切である。